

オンライン学習、あえて「紙」で エプソンなど新サービス

2023/06/13 05:00 日本経済新聞電子版 1296文字

セイコーエプソンと、教育とデジタル技術を組み合わせたエドテックのサービス開発を手掛けるスタディラボ（東京・文京）は、「紙」を中心に据えたオンライン学習サービスを開発した。解答はパソコンやタブレット端末で行うのが一般的だが、新サービスでは配信課題を生徒宅のプリンターで印刷し、解答後はスキャナーで読み取って返す。ITに習熟していない小中学生には紙を使った学習が効果的とされ、学習塾向けに売り出す。

開発したサービス「スタディワン」は、生徒や教員向けに授業情報などを管理する「LMS（ラーニング・マネジメント・システム）」の一種だ。LMSでの課題送信や解答は、オンラインを通じパソコンやタブレットなどデジタル機器上で完結するものが多い。スタディワンの場合、エプソンのクラウドサービスを介して、課題を生徒宅のプリンターに印刷した形で届けるのが特徴だ。

印刷した紙にはQRコードを付与。課題の解答を終えた生徒は、プリンターのスキャナー機能を使って解答用紙をスキャンして返信する。QRコードを配信元で読み取り、学習履歴データなどを管理する。課題の時間予約配信なども備え、講師の働き方改革を後押しする仕組みも整えた。印刷後は、クラウド上やプリンターにはデータを残さず、試験問題の著作権なども保護できる仕様とした。

スタディラボは現在、タブレットを使った学習サービスが主力だ。同社の地福武史社長は「タブレットの場合、ITリテラシーなども関わるので、やはり使いこなして学習効果を出せるのは高校生以上。小中学生の場合、サービスの実証実験の結果からも『紙』での学習効果に勝るものはないといえる」と強調する。

プリンターから課題が印刷されて出てくることで保護者にも課題が届いたことが分かるため、実証実験では子どもの学習習慣作りに家庭の関与が期待できるなどの副次的効果も出ているという。

新サービスは、まずは学習塾での採用を想定している。学習塾市場は、新型コロナウイルス禍での公教育不振なども手伝い現在も拡大が続いているが、2040年には小学生の人数が現在の6割弱まで減るなど、少子化による不可逆的な市場縮小が待ち受けている。

講師の一端を担うアルバイト大学生の人数も合わせて減るため、慢性的な講師不足も発生する見通しだ。地方の中規模都市では駅前でも「塾無し」地域が生じるといわれ、オンライン化が解決策の一つといわれる。

エプソンとスタディラボは、オンラインでありながら「紙」の魅力も打ち出すことで小中学生向け学習塾市場を獲得できるとみている。スタディラボでは、家庭でのサービス導入を支援するサポート部門を既に稼働させるなど、学習塾側の負担を減らす仕組みも整えた。海外駐在員の子どもの教育などの市場も開拓できるとみている。

野村総合研究所によると、エドテックの国内市場規模は27年度に3625億円と21年度から約4割増える見通しだ。今回開発したサービスの仕組みは、資格試験や生涯学習でも活用できる。エプソンはエドテック対応などでプリンターの家庭での活用場面を増やすことで、さらなるプリンター市場の開拓につなげたい考えだ。

（船越純一）



会員制難関受験専門塾「elio」（東京都文京区）は、エプソンとスタディラボが共同開発したサービスを導入している。プリンターの貸出料も含めた授業料体系とし、70人余りの生徒が活用している

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報(以下「情報」)の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.

許諾番号30094127 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。